

# 大陸印象記

白井憲定

猛塵と闘ふ事五日間、夢の様だつた習志野の訓練宮城前に於ける嚴肅なる遙拜式、かくして興亞の戰士の大打進は東京驛へミ繰込む、音樂學校生徒の「海のかば」の曲、肅々として乗車する八百の若人、旗の波、感激の嵐、其れに答へる嚴肅なる舉手注目の禮、我も無し人も無し、實に我腦裏深く刻み込まれたる劇的シーンである。大陸を夢見る戰士を滿載したる興亞の列車は大陸目指して西へへへ。神戸埠頭の感激、今なほ彷彿する旗の波、旗の渦、薄れ遠ざかり行く六甲の山、繪の如き瀬戸内海の景、玄海の荒波、朝鮮沖のお伽の國、かくして我等は大陸に第一歩を印したのである。支那云ひ、支那大陸云ひ、之は恐らく我々生れてより今日迄一日として耳にせざりし事も無く、又一日として其の文字を見ざりし日も無い事である。幼少時に於ける支那は「ちゃんころ」の範圍をば出でなかつた。其れが滿洲事變上海事變に進み、事局は東亞を最終段階に導き、此處に支那事變になりて以來四ヶ年の歲月を経過した。其の間我々は新聞に雜誌に又は講演に種々様々なる方面から事變の何たるかを見又聞き、其れを根柢として極めて漠然乍ら事變に對する一應の解答を構成して居た。

然し乍ら其の頭の中に構成された支那事變云ひ又支那大陸云ひ、誠に非常時局下の學生として恥ず可き事なるが、實に輕薄な觀念的抽象的のものであつて、常に現實から遠ざけられはしないか云ふきらひ無きにしもあらずであ

つた。増して此の戰時體制下に於てさへ未だ根絶する事さへ不可能と思はれ、又反つて蔓延する恐れさへある自由主義個人主義的雰圍氣濃厚なる時、其處に叫ばれる興亞聖行・東亞新秩序が如何にしても痛切な現實觀を我々に與へずして、其の必然の結果、常に疑惑の念を以て如何なる事をも批判し勝ちであつた。かくの如き事は實に現在非常時局下の學生たるものゝ恥辱であり、又かくの如きなるが故に、現下の學生層インテリ層に對する批難の聲が止まざるも當然の事と思ふ。興亞之聖業を背負ふ可き我々にまつて、興亞聖業が抽象的なもの觀念的なものであればあるだけ其處に積極性に乏しく、必然學生の日常生活の上に時局は何等反映する所無く、時局下學生の時局不認識として批難の的となつたのも當然である。

時局は刻々に進展し、所謂世界の潮流に即應して新體制が整へられる。其の場合國民一般は一に其に服従し先づ實踐にうつす、其の場合學生は先づ其の何であるかを批判をし實踐は都合第二段階となる。都會よりは田舎に、學生よりは田舎の純情なる青年に依つて眞先に實踐され行く。學生の第一段階とする批判、即ち一應「理窟」を云ふこと云ふ事は其れも實踐の正確を期するものなるが、其れたるや實に自由主義個人主義的自我意識に立脚した實に許す可からざるものである。先づ實踐と云ふ部門に於ては、指導者を誤らざる限り、其處には批難される餘地は無い。而し乍ら先づ頭で理窟をこねてから行かうとする者にまつて、批判する事をやめて、先づ實踐へに移せば移され無い事も無い。而し乍ら學生は、常に理窟を云ふものと云ふ觀念があるが故に、學生をして理窟ぬきに實踐せしめる事は不可能である。而し批判をするならば其の批判たるや、實に正確なる批判を下さしめうる様にする事が緊要である。時局下の學生が正しき批判を下し得たならば、其の次の段階たる實踐に於ては十二分の拍車が掛けられる可く、又其の實踐こそ最高、又最善のもの云ひ得る。然らば正しき批判とは如何なるものか、それこそ實地を見聞體驗せしめる事である。僕は興亞學生勤勞報國隊の一員として鷹陵三百の若人を代表して北支に派遣せられたる事は、實に重大なる意義を有する。此の意味に於

て、大陸に第一步を印し大陸の土の香を味はひ其處に建設され行く諸工作を見又は實地に體驗する事に依り初めて興亞聖業の何たるかわかり、時局の重大性が痛感せられたのである。

大陸に上陸して故國に歸るまで、見る事聞く事全て「生々しい現實」にも云ひ得るものは、現在までの悲觀的巧利的觀念を否定して、さらに其にこもなふ疑懼や不安を一掃し、腦裏深く大陸を踐みし者のみが知る痛烈なる印象を與へるに共に、大陸が如何に興亞聖業翼賛への我々若人學徒の躍進的努力を要求し居るかを知らず慄然たらざるを得無かつた。

古諺に「百聞は一見にしかず」と現實に支那大陸に立つて見、又極く一少部分なり、こも大陸を知り支那人と交はる事に依つて現在まで頭の中に構成された支那人觀と云ひ大陸觀と云ふものを、或は是正し、或は百八十度の轉換をする事が出来た。今少しく支那人と云ふもの、さらに大陸との二者の上に行はれつゝある興亞聖業について印象の一端を記さん。

支那事變は單にあの蘆溝橋上の日支兩軍の衝突のみに依つて起つたを考へてはならない。其處には數へ舉ぐ可からざる程の遠因と云ひ近因が存するであらう。然らば其の原因を結論付けるならば日支兩國人が眞にひざを交へ胸襟を開いた眞の提携と云ふ點に於て缺點があつた事に起因して居ると云ひ得る。實際膝をつき合せて話し合ふ利那、其處には内地に居て、いだいて居た嫌惡すべきものと云ふ支那人觀は吹き飛び、愛すべきもの、愛せざる可からざるもの、そして自分には受けこられた。成程塘坡上陸した時最初見たあの苦力、それは内地で話に聞き又見もした苦力そのものであり、さらに野原の眞中に列車が停車するにすぐ「飯進上」と云ふ實に力無き轉た寂寞の感をこもなふ聲にこもに、おしよせる支那の小兒達、之が新興支那の子供か當惑するに共に、否これが支那斷末魔の叫びでは無いかさへ思はれる。かゝる時、實に其れば嫌惡すべき支那人とも見られ無いでもなかつた。しかし北京に於ける日支學生交歡會に於て

も實に愛す可きものなる事が痛感せられた。嫌惡すべきは極めて一部門であり、かへつて其の部門こそ憐愍すべきである。更に我々日本人は彼等とは同人種だ云ふ感じを痛切にいだいた。其處に鬭争の存するは相互の不認識が其の原因なのだ。支那人は日本人を日本人は支那人を愛せざる可からずの境地、お互に合掌し合ふ合掌の世界に、鬭争の起る事は無い。感謝し許し合ふ世界こそ、其處に東洋平和は建設され行くのである。其處にこそ王道樂土は建設されるのである。

先づ支那人に最初話す、其處に於ては何ら異國人に云ふ感情が起らない。これが同文同種の意義であらうと思ふ。白人に支那人の前に分別のつかぬ子供をおいて見たとする時、その子供（若し其處へ何か恐ろしい物を出したならば）は支那人の許によりや言葉は不可なりとも歩みよるであらうと思はれる。其處に言ひ知れぬ心強さがあるわけである。さらに又支那人が外交が上手に云はれる。それは彼等が英國の如く老獃であるわけも無く、實に彼等の數十年の歴史がかくあらしめたものである。實に社交的な面子を主とする支那人、實に漫々の中に威大なる業績をのこす其の中に、我々は多大の支那人の偉大性に觸る事が出來た。同化力に富む支那人に云ふ事は既知の事實であつた。而し其れは何故なるか。初めて大陸の風物氣候に觸れた時、又其の中に僅少なりとも生活する事を得て、初めて納得をしたのであり、支那人が同化力を有するとは極めて輕薄な表面的な考へ方だと思はれた。

同化力として彼等支那人の具有する力、其の背後には數知れぬ種々なる構成要素が存して居る。其れが同化力に云ふ一つの言葉にまとめられて居るのである。僅かに一ヶ月滞在した僕が内地に歸還した時第一の歡迎の辭は「支那人くさくなつたな」に云ふ事である。其の様になる其の背後に横たはる原因を考へる時、實に成程に了解も行く事であるわけである。かゝる支那人との接觸は自分に眞の支那人觀に云ふものを與へてくれたのである。

次には大陸に云ふ事である。自分は大陸を表現するのに一望千里に云ひ、又黃塵萬丈に云ふ様な語を用ひて居た。而

し實際良く考へて見た場合それは極めて一部分を而も無難に表現したものと云へよう。

一望千里も眞夏の農作物が繁茂せる時には何も味はふ事が出来ず、大陸に云ふものが日本の平野の延長にすぎないに云ふ感さへ起つた。廣いと言ふ言葉の概念についても大いなる差があるわけで、日本海が廣いと言ふのは太平洋の廣いに云ふ時其處に云ひあらはす廣いに云ふ言葉に非常な差がある如く、箱庭式の中で廣いに云ふ概念を以て、それを大平原大山野へ持つて行つてもそれは意味をなさぬのは當然である。其の様な譯で支那大陸を日本の平野の延長に考へたりする誤りが生ずる。又反對に最近行はれた河南省訪日視察團々員の感想を聞けば、日本の平野を見て居るに眼がまはるに云つたのも當然である。あの豪壯にも云ふ可き紫禁城天壇を平氣で見て居る支那人に日本中の如何なる大きな寺院建物に案内しても其れは驚嘆しないのが當然であるわけである。

此の様な大陸を見此の上に漫々的として働く支那人を見る時其の上に建設の歩を進め行く興亞大業に云ひ、東亞新秩序に云ふものが如何に至難なるかわかるのである。觀念的抽象的、空想的に頭の中に畫かれた東亞新秩序、其れも具體的な現實的な而も躍動し無限に進化し進動し行く姿になつて眼前に展開せられる。其處に於て初めて大業貫徹の主要性も如實に知る事が出来るに共、其の反面に其の困難を克服し徐々に而も逞ましい勢で進められゆく治安維持の諸工作及建設工作は大業完成の礎石とも見る可く、前途に對する不安疑懼を一掃すべき光明の觀がある。

然も此の輝かしき希望に意欲に云ふものが、日の丸の御旗のもににつきふ同胞の上に認め得て、限り無き信頼性を得るに共に反射的に此と同じ情熱が痛烈に湧き起り來る事を感じた。

更に此の興亞の大業に云ふものは單なる資本機材の調達運用に依る唯物的立場や、又少數爲政者の手腕に頼つた寡頭政治政策的立場に立脚する限り絶對成就されるもので無く日支兩國人の互に胸襟を開いた端的な、而も密接な魂の交流を共感し、互に東亞の民族なり云ふ自覺を以て、人間的道義に立脚して、二者相提携し行く時、初めて興亞の大業も

完成され行くに云ふ事を知り得たに同時に、層一層大業翼賛に對する全身的情熱の躍如たるを覺えざるを得なかつた。其に同時に彼の鈍重な而も慢々的な大陸が早急に熱烈に興亞の戰士を要求し居る事を感じた。

さらに宗教之部門を擔當する自分にしてあらゆる人より開教の現狀を聞き又實際に見、又當局者の意向を伺ひ、更に支那人に云ふものを幾分なりとも知る事に依つて、非常に刺戟される所があつた。

河南省余北道公署主催の一座談會の席上に於て前に居並ぶ支那要人等に向つて「此の中で佛教信者はどの位ですか」云ふ質問を發した所、殆んど九割まで佛教信者なる事がわかつた。其れから其の要人等に「では日頃は如何なるお勤めをして居るか」と聞いた時、道尹閣下が盛んに合掌して其の眞似をして話した。しかし通譯の不備な爲終に其の内容を知る事は出来なかつた。然し佛教信者が他の道教・基督教に比し壓倒的多數であつた事は事實で、此處に非常な強みを感じたのである。然し其の後に日本で云へば縣廳の課長級の一人が僕に向つて「大乘」と「小乗」の區別を尋ねて來た。其れに對して僕は自分の智慧を全部しほつて答へてやつたが其れが少しも理解してくれずに終つたが、後で聞いた所「或る人は彼等は非常に學問の程度が低いから専門の事は解からぬ」と辯解してくれた。勿論こちらは「専門の事は何一つ云つて居なかつたわけである。其の席上で現在河南省に於ける開教狀況についての質問を發した所其の河南新報社長の僕に對する解答は次の如き意味であつた。

現在日本に於てさへ宗教家に對する批難の聲は止まない。其の僧侶が「たい何をしに來るのか。内地に於て一般國民の頭から等閑視され行く僧侶が、如何にして此の前線にて布教が出来るか」と云ひ度い。其の開教に云ふ實に耳ざはり良き美名は現下時局に對する一つの御世辭に過ぎない。宗教的信念に缺け又々愛宗護法の念も無くたゞ政府に對し軍部に對し申し譯的に來てやつて居るかの如くしか見えない。其の必然の結果は何に歸するかと云へば、支那に來て日本人相手にするより外は無い。所が其の布教は不可能である。何故かと云へば其の前線に於ける内地邦人の空氣を見れば分

る。遙か故國を離れて數千里日章旗のもこに皇軍兵士に守られ乍ら、八紘一字の大精神に生き、皇國の爲新東亞建設の爲活躍はして居る、而し乍ら常に異國人中に立ち働き戦地を云ふ恐怖あわたしきの中に常に生命を危険にさらして居る。其の場合彼等の中に念頭に置かれてあるものは實に一も現實なれば二も現實である。其日其の日の實に涙ぐましい闘ひがくりひろげられて居るわけである。實に其の生活に暇があらう筈が無い。其の様な邦人相手に布教する事は（若し出來た場合、否其の様な人こそ我々は布教すべきではあるが）實に至難な事である。

又彼等がかうして見る時、「お寺なんかへ參つて居る暇が無い」と云ふのは當然である。又實に悪い言葉で云へば「一肌組」が多いわけである。其の様な人が寺の看板を見て自分等と同じ様に、「僧侶も來たな」と實に商賣友達の様にして居る。其處に經濟的に十分めぐまれずに前線の開教と稱して來る時必然前線邦人の布施で考へる。前線に於てこそ僧侶は戰で財産を失ひ路頭に迷ふものを救はねばならぬ。それが邦人の布施相手に仕事をするに云ふ事は餘りにも氣の良すぎた事で言語同斷の事である。其處に於て如何なる小さな村、町にも嚴然として聳ゆる教會を見る時、實に慨然たらざるを得なかつた。

經濟的援助の豊富な彼等は實に堂々たる教會を所有して居る。支那に於て大教會は別として、普通一般都市、又は村落に於て一番立派な建物は實に此の教會である。其處に於て莫大なる經濟援助と國家的支援を以て打ち立てられた時教會の鐘は永久に夕べの時を知らせるであらうし、支那民衆に夕べの祈りを捧けしめるだらう。彼等基督教教師等は實に四十年五十年に支那大陸に無智蒙昧の支那民衆を友として活躍して居る。新郷の町は人口六萬もあり乍ら女學校も無い、然し乍ら洋書のバイブルを抱へ教會へくく洋車を走らす姑娘を見る時、實に其の牢固として抜く可からざる彼等の勢力に一種の云ふに云はれぬ恐怖を抱いた。嚴然として聳ゆる十字架に向つて支那民衆が集ひ來る様な氣がしてならなかつた。三十年四十年に住む事に依り、實に支那民衆に溶け込んで其處に博愛の手をのべる時、支那人にして其の手

に引かれない者は無いのは當然である。其處には強制も努力も何も要しない。實に支那人の心からなる崇敬的、又神として崇はれるのである。其處に經濟的支援も少く、又愛宗護法でも名義ばかりにして、しかも語學に通達もせず、開教師として堂々名乗り込んでも其處に功績のあがる筈は無いのは當然である。如何なる傳道所か云へば支那人家を改造せるものである。支那人に古來より歐米崇拜の思想があるのは當然である。第一教會からして實に壓迫感さへ與へるに同時にそれは崇拜的なるのである。さて傳道せんとしても傳道する事が出來ず。其れか云つて大同團結せんとしても宗派意識より脱却し得ず、此の様な状態が現在の開教區の状態である」こまあこんな意味の事であつた。其の様な状態を眼前に見せつけられたる時實に慨歎おくあたはざる者があつた。新郷本願寺に參詣中に一人の僧侶が訪ねて來た。實に鄭重に三拜をして云ふのに自分は山西の山の中の一僧侶で、實は「某々」云ふ人を尋ねて來た云ふ。しかし本願寺主任も知らなかつたので歸してやつた、が、又鄭寧に三拜して歸つた。其の後で彼主任の曰く「支那では坊主は乞食同様ですよ。」云はれた時例へ支那人云へ同じ佛陀の御教を受ける者が、乞食と同様あつかはれる聞いた時は實によほく過ぎ行きし支那僧侶の後姿が想ひうかび出されるに同時に、幻滅の悲哀を感じざるを得なかつた。丁度思ひ出したが北京滞在間、中南海公園に於て某參謀の講話の時學生の方から質問をする事になつた時「北支に於ける宗教特に佛教の活動について」云ふ質問を提出した時滿堂の嘲笑をかつた時實に切齒扼腕實に斷腸の思をした事を知つて居る。かく極めて一部分なりとも開教の現状を聞き又實際に見又當局者の要求を聞く時、又現地開教師の無力又無力ならざるを得ざるを見る時宗教家としてこの興亞聖業を翼賛す可き部門があまりにも多く、又實際の宗教家に希求する所大なるを痛感した。

故國を出發する時内閣更迭のニュースに何もなく不安の念を以て出發した。然し自分が實際支那の土をふみ、眞に興亞の聖業の何たるかを幾分なりとも知り得て、此の新體制下の故國に歸つた時出發前の疑惑は一掃せられ興亞聖業遂行



への躍進的第一步はすでに踏みめられて居る姿を見た時筆舌につくし難き感激を覺えた。

大陸を蹈んだ我々こそ見聞せるもの全てを以て新體制下の學生の覺醒をうながしこれをあらゆる部門に敷衍する事に依つて興亞聖業は遂行せられ行くものなる事を痛感した。

## 宗 教 的 努 力

樽 本 憲 正

吾人が人々との間にあつて生存して居る限り、そこには必ずその人間生活の規範たるべき道德が必要であり、又人が存する限りなやみは盡きず従つてそのなやみにおける人間の生命の問題に解決を與へしめて、より力強く人生の正しき規範道を踏み行はせしめる宗教の必要なる事は今更云ふまでもない事である。

私は今こゝで宗教、ミくに吾等日本人の育ての親である日本佛教について述べ道德との關係を明にします。宗教の不可缺重大性を述べ、以て時局日本の宗教界に訴えんとするものである。

凡そ吾人を生かし育て、今なほ日本國民の靈の糧となつて居る日本佛教は、その要素として二つの偉大なる眞理を藏含して居ります。その第一要素は一乘思想即ちすべての存在は一つの根本原理たる重々無盡の因果關係によつて成立し、この法を見る者は佛を見るのであり萬有は一々差別し一つとして同じものなく、亦同時に一つとして全く孤獨なるものではなく、實に相互關係して居るばかりではなく、同じく無量の縁によりて成立ち、それが現實に生起しては法な